

不識水指

—常滑の茶陶考

神崎 かず子

はじめに

以前担当した展覧会前後の調査で複数の不識水指（ふしきみずさし）と出会った¹。いずれも江戸時代中期から後期に常滑で作られた水指で、上村白鷗（かみむらはくおう）をはじめとする名工や久田宗也（ひさだそうや）などの茶人、あるいは名も無き陶工の手によるものである。これらの中に、不識水指は利休が茶会で使ったものの写しであることと、その後の伝来などを詳細に箱書したものがあつた。それが京都の茶人久田耕甫（こうほ）の手作りによる水指である（図1）。本稿はこの水指を手掛かりに、茶会記や茶書などから主だった掲載部分をまとめ、当地の茶人に愛用されている不識水指について考察するものである。これは江戸時代後期まで茶陶がないといわれてきた常滑を見直し、桃山時代に茶陶制作を試みていた可能性を探る試論でもある。

1. 資料紹介—江戸時代の不識水指—

はじめに、2例の不識水指を資料紹介することとしよう。

図1は文化元年（1818）久田耕甫（こうほ）が手作りした共蓋（ともぶた）水指で、肩に柏の葉が刻文されている。箱の蓋表には「不識摸 常滑焼」、同じく裏には「利休少庵元伯江岑宗全 薩摩や道甫同素朴日比禎斎 尾張なこや太郎庵小沢宗淳半床宗也 居士百会雲龍に取あはされたる はけもの是也なきものといふ事也 所謂不識ト宗旦いへるも禅語にて化物之意也 宗悦判 右今尾州知多郡大野濱嶋傳右衛門ニアリ 請之而於常滑摸造之 耕甫（花押） 文化紀元甲子冬」と耕甫自身の箱書がある（図2）。その内容を要約すると、この水指の伝来は「利休・少庵（しょうあん）・宗旦（そうたん）・江岑（こうしん）・宗全（そうぜん）、薩摩屋道甫・素朴・日比禎斎、尾張名古屋の太郎庵・小沢宗淳・半床宗也（はんしょうそうや）、（と伝来し、当時は）尾州知多郡大野、浜島伝右衛門（はまじまでんえもん）家」にあ

ること、また「利休百会記にある雲龍釜（うんりゅうかま）に取あわされた“はけもの（水指）”がこれである。宗旦が不識と呼んだのも化物の意である」それを「(耕甫が)文化元年(1804)冬に常滑で模して作った」となる。

また、これに先立ち久田不及斎宗也（ふきゅうさいそうや）が常滑で手作りした作品が図3で、底には「於常滑造之（宗也花押）」の刻銘がある（図4）。図2の箱書にある「半床宗也（はんしょうそうや）」は不及斎宗也本人であり、本歌（ほんか）を所有していたことから、その写しとして手造りしたものであろうか。蓋は後に皎々斎（こうこうさい）が赤楽で作って補い（蓋裏「皎々斎花押」刻銘）、箱蓋裏に「不及斎作 常滑水指 彫文字アリ 蓋代に造之 追銘クセ者ト号 皎々（花押）」と記している。

これらの不識水指を好んで作った久田家の人々とは京都の茶家である。利休の妹や宗旦の娘が嫁いで千家とは近い姻戚関係にあり、同家との養子縁組も多い。江戸中期の尾張には覚々斎（かくかくさい）に入門した豪商たちによって千家の茶の湯が広まっていったが、不及斎は久田家四代、覚々斎の弟にあたり、名古屋城下や尾州大野へ茶の湯をひろめている。ちなみに次の五代目からは高倉久田家と両替町久田家に分かれ、皎々斎（こうこうさい）は高倉久田家七代、耕甫は両替町久田家七代にあたる²。

この久田家代々が不識水指を好んで作り、箱書きを残したのは、これが千家の始祖利休に直接繋がる道具であったためであろう。ちなみに、千利休は天正19年（1591）に豊臣秀吉の怒りをうけて自刃したが、元禄3年（1690）の百回忌頃には茶聖と呼ばれて復権している。当時の茶人は侘び茶の原点として利休への回帰をめざし、伝承や記録をたどりながら利休を伝説化している。また同時に、伝来の道具にも注目が集まり、写し物などの需要も多かったのではないかと推察されている。

図1・3はこうした類の水指である。図2の箱書には本歌（ほんか）の利休以降の伝来が書かれ、次いでこれが利休百会記で雲龍釜と取り合わされた「はけもの」水指であり、「はけもの（化物）」とは禅語の「不識」を意味するため、後に孫宗旦によって「不識」とよばれるようになった、と記されている。「不識」とは、『碧巖録（へきがんろく）』第一則の問答にある梁の武帝の問いに対する達磨大師（だるまたいし）の答で、転じて、達磨大師を意味することもある。したがって、「化物」＝「不識」、すなわち達磨大師のことであり、人知を超えた存在の意を表したものであろうと思われる。「不識水指」の名称も、宗旦以降広まっていったものである³。

2. 掲載史料

それでは、利休伝来の「はけ物水指」あるいは「不識水指」はどのように記録され、伝えられてきたのであろうか。以下に茶会記や茶書・陶器書などの関連部分をまとめてみよう。

(1) 『利休百会記』(りきゅうひゃっかいき)⁴

天正 18 年(1590) 8 月 17 日の昼会、客は矢嶋久右衛門と草部屋道説、茶室は二畳敷、道具の取り合わせは「雲龍釜 はけ物水指 茶入小なつめ 黒茶碗 閑居の壺 をりため(茶杓) せと水こほし(以下略)」という記録が初出である。全 96 回の茶会記録の内「はけ物(化物)水指」の記述が見られるのは 10 回、その内の 7 回が雲龍釜との取り合わせになっている。

(2) 『茶道筌蹄』(ちゃどうせんてい)⁵

「不識 利休所持。化物は友蓋なり。少庵、宗旦、宗全、宗也まで傳來。此後尾州大野濱島傳左衛門へ傳ふ。此外元伯銘の不識といふあり。是は不識の始なり。山中氏所持原叟好の盆の蓋あり。ブセウモノ、不働の二銘あり。不働は郡山侯御所蔵、ブセウモノは浪華今宮宗了所持なり」と記載されている。

ここには、①利休所持の共蓋(ともぶた)の「化物(ばけもの)」(少庵から宗也まで伝わり、この後浜島家に伝来)。②「不識(ふしき)」と宗旦が命銘したもの(山中氏所持。原叟好(げんそうこのみ)の盆の蓋付)。③「ブセウモノ」銘のあるもの(浪華今宮の宗了所持)。④「不働」銘のあるもの(郡山侯の御所蔵)。と、4 例が紹介されており、図 1 の水指の本歌は①であり、当時からすでに有名であったことがわかる。

(3) 『中興名物記』(ちゅうこうめいぶつき)⁶

「一 不識之水指 本箇 袋屋二徳 覚々齋御話ニ被申候、宗旦前後感心のよし、」

本歌が掲載されており、元禄年間(1688~1704)頃には千家名物として認識されていたことがわかる。「袋屋二徳」が所持し、覚々齋も認めた名品であること、宗旦時代の前後の頃に作られたと考えられている。

(4) 陶器書『本朝陶器攷証』(ほんちょうとうきこうしょう)⁷

「不志木 世上に南蠻不志木、信樂不志木ありといへども、南蠻物にてはなし、和物なり、尾州知多郡にて至て古く焼たる物といふ、夫より追々焼しものなり、知多郡に不志木大明神と申す社あるよし、惣體作手品多く色々あり、上手の者作造形等も品よく出来、地色・歯色に青・赤・黄薬の替りあり、又出来なしに押形有もあり、信樂出来にて黄薬たつぷりと出るもあり、其外薄赤みの素土にて、柏など押形あるも有、上作の物は南蠻物のやうに見ゆるなり」

ここでは「不志木」と当て字をしている。南蛮（なんばん）と信楽焼にあるといわれているが、南蛮ではなく知多の常滑焼であり、信楽焼もあること。柏など印文あるものもみられること、上手のものは南蛮物のようにみえること、などと記されている。

3. 不識水指の産地

このように江戸時代後期には、利休伝来の名品とその類の小壺が「不識水指」として知られていた。そして、その産地に関しては「南蛮」説などがある一方で、地元では「常滑」との認識がすでにあり、このことは先の2例以外の多くの不識水指写しも伝えるところでもあった。ちなみにその理由は明白で、常滑には鎌倉から室町時代を通じて生産されてきた伝統的な小甕（こがめ）があり、この水指がその系統にあたることは一目瞭然であったからにほかならない（図5）。いうまでもなく、これらは量産された日用雑器であり、主に貯蔵容器として用いられていたものであった。

ここで思い起こしておきたいことは、侘び茶が流行し始めた室町時代後期には、信楽や備前の水指が使われはじめていたことである。いずれも当初は日用雑器からの転用品であったと思われるが（図6）、おそらく早々と茶の湯専用の道具として制作しはじめ（図7～9）、次第に茶人の注目を集めていったものと推察されている。鬼桶（おにおけ）や種壺といった桶形・壺形などが水指として使われ、珍重された例は数多く見うけられる。

こうした流行に対して、他の窯業地でも同様の取り組みがあつて不思議はない。尾張では瀬戸が天目・茶入・茶壺などを生産し、常滑は信楽や備前よりも早い時期から焼き締め陶器の一大産地として稼働していた。この窯で、先に紹介した小甕を水指の寸法に合わせ、柏の葉などを印刻して茶道具に仕立てることは容易いことである。しかしそれが『利休百会記』に掲載されるためには、利休と同時代で、かつ利休と面識がある人物が介在したのではなかろうか、という推測はたらく。そこで浮上してきたのが、常滑の三代城主水野監物守隆（みずのけんもつもりたか）であった⁸。

4. 茶会記に記された水野監物

水野監物守隆は信長に仕え、連歌や茶の湯を愛好する戦国武将であった。元龜元年（1570）摂津国河口で先陣を張り、天正2年（1574）尾張国長島の一向一揆に出陣、同4年大阪天王寺附城を攻略、同10年武田勝頼を攻略、と数々の武功をたてたことが『信長記（のぶながき）』

に記されている。しかし天正10年(1582)本能寺の変の時には、「此日未刻計、此事聞安土、(中略)又尾張国の水野監物は則従明知、…明知果て後、終に監物は牢(浪)人也」との記述が『当代記(とうだいき)』にあり、この時明智方についてため常滑城を出ることになったと思われる。その後は「城落去の後、山城国嵯峨に住し、慶長三年四月二十一日死す。」⁹と伝えられている¹⁰。

『天王寺屋会記(てんのうじやかいき)』『宗湛日記(そうたんいき)』『利休百会記』『南方録(なんぼうろく)』などにその名が記されているのはこの人物と考えられる。早い例では『天王寺屋会記』宗及自会記の天正4年(1564)12月13日朝会に客「水野監物 奥村平六左」と記され、宗及(そうぎゅう)の茶会に招かれていたことがわかる。同じく宗及他会記の天正7年12月5日、奥村平六左衛門の朝会にも客「甚九郎殿 宗及 宗二 後に宗易 水監」と記されている。こうした記述からは、堺の豪商との交流がこの時期すでに行われていること、利休(当時は宗易(そうえき))と同席で茶会に参加していること、などが知られている。

また本能寺の変後は洛西へ隠棲したが、その後は風流三昧に過ごした様子が茶会記に伝えられている。『天王寺屋会記』宗及自会記の天正11年(1583)1月17日には「茶過テ水監大壺ヲ見せ申候」と常滑大甕の披露が連想されるような記述があり、また天正12年9月13日昼会には利休と共に招かれ、夜まで滞在し名月を楽しんだ、とある。さらに『利休百会記』には天正18年9月20日朝会に武田左吉とともに招かれているが、その時の取り合わせは「はけ物水指」が雲龍釜とともに用いられ、「水けんノ御茶」すなわち監物が持参した茶で茶会を楽しんでいる。また、これ以外にも監物の茶会の記録¹¹なども残されており、堺の茶人達との近い交流関係をうかがい知ることができるのである。

むすび

今回は不識水指周辺の伝承を通して、利休に直接繋がる「はけ物水指」が常滑焼である可能性を検討した。このことは当地では古くから言い伝えられてきたことであり、本稿は状況証拠を積み上げていくような作業となった。しかし不十分であったのは、利休の「はけ物水指」を宗旦が「不識」と命名したいきさつが間接的伝承だったことである。この点について直接的な根拠が見出せれば、「はけ物水指」常滑説が説得力を増すものと思われる。

また、本論では触れなかったが、宗旦が「ふしき(花押)」と記した掛物が添う不識水指のある茶会の展覧席で拝見したことも報告しておきたい。これはかつて沢田由治氏が本歌として紹介したことのある水指で、久田宗也が小沢三左衛門(宗淳)から買い受けた際の覚書(お

ぼえがき)が添うといわれている¹²。この時は展覧席で拝見するばかりであったが、一見してこの水指が常滑の伝統的な小甕の類であることは明白であった。しかし、その作振りは威風堂々とした貫禄にあふれ、特別に詠えられた別格の雰囲気があり、さすがに本歌とされる所以が伝わるものであった。この水指には「はけ物水指」と「不識」をつなぐ周辺資料が見出せることを期待するばかりである。

さて、本稿の目的は、常滑において桃山時代に茶陶制作を試みた可能性を探ることであった。それは、常滑焼を焼き締め茶陶へ参入させることが一水野監物などによって一画策されたのではないかと考えられたことと、また同時に、不識水指が伝統的な常滑小甕の様式をそなえ、備前や信楽の桶形や種壺に比肩できる格好の素材であったこと、さらに利休をはじめとする千家の茶人に繋がる伝承があったこと、などをふまえた試みであった。その結論としては、どうにか江戸時代前期にはたどりつけた、というところであろう。すなわち、利休と常滑を直結するまでには至らなかったが、孫の宗旦にはつなげることができた、ということである。しかし、時間をかければさらに資料も整い、本歌が公開される機会にも恵まれるかもしれない。利休と常滑を結びつける最終的な結論については、今しばらく保留ということにしたい。

本稿を執筆するにあたり、御所蔵者および中野晴久氏をはじめとする関係者の方々にご協力・ご教示等をいただきました。ここに感謝の意を表する次第です。

註

- ¹ 『茶の湯とやきもの一尾張・三河の茶人たちをめぐってー』平成11年(1999)
- ² 久田不及斎(1681~1744)は久田家四代、別号は半床庵。久田皎々斎(1777~1819)は高倉久田家七代。久田耕甫(1754~1820)は両替町久田家七代、別号は半床庵、春斎。五代宗玄以来、東海地方に多くの門弟があり、代々が犬野町の浜島家、西村家などを訪れて茶の湯を広めた。
- ³ 「不識」『茶道筌蹄』
- ⁴ 千利休最晩年の茶会記。天正18年(1590)8月17日~翌年閏正月24日までの96回におよぶ。『茶道古典全集 第六巻』所載。
- ⁵ 文化13年(1816)稲垣休叟が著した茶道全集。
- ⁶ 名物記の一種。元禄年間(1688~1704)前後の千家家元やその流れをくむ茶人所有の侘道具が多く掲載されていることから、『千家名物記』とも称された。
- ⁷ 安政4年(1857)序文、金森得水が著した日本陶磁器の窯別通史。国内初の本格的な陶器解説書であり、明治26年(1893)以降流布した。
- ⁸ 沢田由治「不識水指」『陶説304』1978年
- ⁹ 「水野半左衛門家譜」『寛政重修諸家譜』

¹⁰ 瀧田英二『常滑史話索隠』 1965年

¹¹ 天正7年3月19日朝会に佐久間甚九郎と宗及を招いている。『天王寺屋会記』（宗及他会記）

¹² 沢田由治「不識水指考」『陶説 419』 1988年